

栗野地藏さま由来記

茶の泡の滴へし春夜の咄哉 幹哉

栗野の地藏さまは、昔から「縁結び、子授け、子育て、延命」の地藏さまとして、近郷近在はもちろん全国的に信仰を集めております。

本尊の地藏菩薩は弘法大師の作と言われており、「栗野地藏尊略縁起」によれば、弘仁二年（八一）弘法大師が出羽三山へ遊行の途中、栗野の里に立ち寄られ民家で茶を求められました。茶の接待をした娘は大師の凛々しいお姿に一目惚れしてしまします。

大師はすぐに立ち去りましたが、娘は恋しさのあまり大師の飲み残した茶の泡を飲んだところ、お腹が大きくなり、やがて玉のような男の子を産みました。

三年後、大師が出羽三山の帰りにこの家の前を通ると、待ち構えていた娘の父母が、

「よくも大事な娘を傷物にしてくれた」

とばかり、口を揃えて罵り、詰め寄りました。くわしく理由を聞いた大師は落ち着いた口調で、

「それは妄想の産物ですよ」

と、抱き上げた三才の幼な児に向かって呪文を唱えますと、幼な児はたちまち元の茶の泡と消えました。大師はその幼な児の供養のために四寸六分の地藏菩薩像を彫って、末永く祀るようにといい残し再び旅立ちました。

これを「泡の地藏尊」といい、「あわの」の地名になったと伝えられます。また一説には、「泡の地藏尊」のご利益が广大で、まるで広野に粟を散らしたようだということから、栗野と名付けられたとも言われます。

祭礼は毎年春お彼岸の中日に行われ、十二年に一度の丑年には四寸六分のご本尊が御開帳され、多くの信者が全国から訪れます。

春には境内の樹齢三百年余のしだれ桜が今なお美しく花を咲かせ、すぐ近くには大師が残した茶を飲んだ娘、お藤の家と言われる「お藤茶屋跡」が残っており、藤の花盛りには実に見事な景観を見せてくれます。

